第４回 Zoom を活用したオンラインで研究会を開催して

１０ 月３１日に、令和２年度第４回の研究会を開催しました。 県内９人の方々と議論をいたしました。

今回は、「特別支援学級の児童・生徒を障がい児らしくしているのは教師自身の対応だからではないか？」という S・M さんの意見から、障害をもつ児童・生徒や配慮を要する児童・生徒への教師の向き合い方、学級づくり、授業づくり等を議論しました。

他の児童・生徒と違う点をよく観察したことで、当該児童・生徒の行動が理解できるようになったという若い教師の実践報告がありました。また、大変な児童・生徒が出現すると学級の中にたくさんの教員や支援員を配置する学校の“手厚さ”に対して、安定的な生活と子ども同士の交流の阻害へのジレンマを語った中堅教員の本音が聞かれました。ベテラン教員のある方は、以前特別支援学級を担任したときのことを振り返り、「よい、悪い」の評価ばかりしていたことに、ある先生から『〇×の評価ではなく、実社会の中で必要な本物じゃないとだめなんだ』という言葉が心に残っているという話を窺いました。

森田先生からは、情動に話をお聞きしました。学校以上に社会が学校化していること。すると情動に注目があつまるようになること。社会的病理が起きやすいこと、だからこそ“本物”が必要になっていることがご自分のお考えということで紹介されました。本物とは、目標への到達ではなく、感情のゆさぶりがある活動、心が動く教育活動ということという話を窺いした。

また、学級担任の仕事は、人と人との関係性ではなく、人と集団との関係性になってしまいがちだという話も窺いました。一人の人として子どもと向き合う大切さ、一人の子どもと向き合ってもがいている教師の姿勢がもっと評価されるべきであること、一人ひとりの人間がそこにいるのが学校という、改めて参加者全員が考えさせられるお話しでした。

授業については、もっと教師自身がわかろうとする時間を持つ教材研究が必要なことも納得しました。“教える”ための教材研究から、もっと教師自身がわからないことがこんなにあるんだと感じる教材研究に働き方改革が叫ばれている今だからこそ重要であることを窺いました。

今回も、参加者の考えを聞きながら、答えのない議論を通して、明日からの教師としての成長のエネルギーをいただきました。

研究会参加希望の方は、ここにメールをください。

shinyatk1616n@yahoo.co.jp